

意志の自由とパーソンの概念

フランクファート, H. G.

林 誓雄

パーソンの概念について

従来の定義[たとえばストローソン]では、(1)身体的な特徴を帰す述語 + (2)意識状態を帰す述語 を当てはめることができるかどうかによって定められてきた。その結果、パーソンであるための基準 criteria は、人間種と他の動物種とを区別するものでもあった。

だが、パーソンの概念は、必ずしも人間種に限定された属性の概念として理解されるべきではない。そして、パーソンと他の動物種との間にある本質的な違いは、**パーソンが持つ意志の構造**のうちに見出すことができる。つまり「二階欲求」「二階の欲求」を形成でき、かつその際に見られる**反省的自己評価の能力**を持つものがパーソンとされる。

1

一階欲求と二階欲求と意志

◆ 一階欲求を特定する「A が X することを欲する」という形の言明 S1 について

言明 S1 は A の「意志」を特定しているだろうか？ → No !

意志の概念は、一階欲求の概念と外延が同じわけではない。行為者の心の中には、「いくつかの一階欲求」とパーソンを最後まで行為へと動かす「効果的な effective 欲求」とがあり、後者が「意志」である。

◆ 二階欲求を特定する「A が X することを欲する」という形の言明 S2 について

[1] 言明 S2 が述べられるときに意味しているのが、《ある人はある欲求 X を持つことを欲するかもしれないが、一義的に言うと、彼はその欲求が満たされて欲しくはないと欲しているかもしれない》という場合

[Ex.] 麻薬中毒患者に対する心理療法に携わっている医者が、《ドラッグを欲求することが患者にとってどのようなことなのか、ということ自分をよりよく理解すれば、患者を助ける自分の能力が向上するのではないか》と考える場合。

彼は、ドラッグへの欲求を持つことを欲する [二階の欲求をもつようになる]。

だが、《ドラッグを服用したいという欲求によって動かされることを医者が欲している[二階欲求持っている]にもかかわらず、彼はこの欲求が**効果的なものとなることを欲してはいな**

1

い》ということは可能。つまり、医者はその欲求[ドラッグへの欲求]に突き動かされて最後まで行為に至ることは欲していないかもしれない。むしろ、実際には、ドラッグを服用したくないという完全に一義的な[一階]欲求を、その医者は持っているかもしれない。つまり、ドラッグを服用するよう動かされたいという彼の二階欲求は、ドラッグを服用したいという一階欲求を彼が持っていることを含意しないのだ。よって、**彼が X したいと欲することを欲するという事実[二階欲求を持つこと]は、彼の意志の特定 identification とは関連しない。**

2 言明 S2 が述べられるときに意味しているのが、《A は、X への欲求が自分を効果的に動かして行為へ導くような欲求になることを欲している》という場合それは、《X への欲求が、多かれ少なかれ彼を行為へと動かす・傾ける欲求のうちの一つであることを彼が欲している》というだけにとどまらない。彼はこの欲求が**効果的なものとなることを欲している**。そしてこの場合、言明 S2 には、《A は前々から X への欲求を持っている》ということが含意されている。

Ex. 自分の仕事に集中したいという欲求によって、自分のやることへ動機付けられたいと欲する人を考えてみる。彼は前々から自分の仕事に集中したいと欲している[一階欲求]。もちろん、この欲求は今現在、彼のいくつもの欲求のうちの一つに過ぎないが、彼はこの欲求に、自分の**効果的な欲求、すなわち意志**となるよう欲している[二階欲求]。

- ・ + [1] → 行為
- ・ [2] + [1] → 行為 … 2
- ・ [2] + → ~~行為~~ … 1

2

二階の意欲 — パーソンとワントン —

《人が二階の欲求を持っている》と言えるのは

(A) 《その人がある欲求[一階欲求]を持ちたいと端的に欲するとき》か

(B) 《ある欲求[一階欲求]が自分の**意志**になって欲しいと欲するとき》かのどちらか。

(B)における二階欲求を「二階意欲 volition」あるいは「二階の意欲」と呼ぶ。そして、**パーソンであるための本質的要素を、二階欲求を持っていることではなく、二階意欲を持っていることとする。**

2

《二階欲求は持っているが二階意欲を持っていない行為者》はパーソンではない。このような存在を「**ワントン wanton(単純欲求者)**」と呼ぶ。ワントンの特徴的なのは、**自分の意志についての関心を持たない**点である。また、理性的能力の有無によっては、パーソンとワントンは区別されない。

- パーソン： 理性 + [1] + [2=意欲]
- ワントン： 理性 + [1] + [2]

Ex 二人の麻薬中毒患者

【1. 自分の中毒を嫌がっている患者：パーソン】

自分の中毒を嫌がっている患者の心の中では、一階欲求同士が衝突し合っている。つまり、彼はドラッグの服用を欲している[一階]と同時にドラッグをやめたいことも欲している[一階]。しかしながら、これらの複数の一階欲求に加えて、彼は**二階の意欲**を持っている。つまり彼は、**前者よりも後者の欲求の方に、効果的なものとなることを欲している**。

【2. 自分の中毒について関心を持たない患者：ワントン】

ワントンは、自分を行為へと動かす欲求が、自分を行為へ動かすものであることを欲する欲求であるかどうかに関心がない。もちろん、一番目の中毒者と同じように、ワントンも一階欲求の衝突で苦しむかもしれない。だが、ワントンは自分の衝突し合う諸欲求のうちの一つが、他のもの以上に最優先であるべきだということを選好しない点がパーソンとは異なる点である。

【1-2. パーソンの中毒者】

パーソンの中毒者は、二階意欲の形成を通じて、自分自身を、衝突し合う一階欲求のうち的一方よりも他方と同化 identify させる。彼は二つのうち一方を真に自分のものとし、そうすることで、他方から自分を分離させる。二階の意欲を形成することを通じて達成されるこうした同化と分離によって、パーソンの中毒者は、重要な意味で、分析が困難な言明を行なうのだ。すなわち、自分をドラッグの服用へと動かす力は、自分自身のものではない力であり、そして自分自身の**自由意志**ではなく、**自分の意志に反するもの**によって、自分はドラッグへと動かされるのだ、と。

【2-1. ワントンの中毒者】

他方、ワントンの中毒者は、自分の衝突し合う欲求のうちどちらが打ち克つのかについて気にかけることができないし、実際にしない。ワントンにおける一階欲求の衝突は、衝突し合う諸欲求が持つそれぞれの強さによって解消される。だが、自分の渴望ないし忌避のうち、どちらが優位に立つかということは、彼にとって関心のないことである。

3

二階の意欲と意志の自由

パーソンであるための重要な要素である二階意欲を形成する能力は、**意志の自由**とも密接に繋がっている。一般に、「自由であるというのは、根本的に、人がしたいことをするという事」といわれる。だが、動物には「意志の自由」がないと想定されているが、動物が自分の好きな方向に走っていく自由を持つということは認められている。それゆえ、「したいことをする自由を持つ」というのは、自由意志を持つことの十分条件でも必要条件でもない。

《パーソンの意志が自由であるかどうか》を問うとき、《彼には自分の望むようにする自由があるかどうか》が問われている。そして、この問いは**彼の欲求そのもの**と関わっている。

意志の自由＝自分がそれを欲すことを欲するところのもの[一階の欲求の対象]を欲する自由

He is free to want

what he ^[2]wants to ^[1]want

⇒ 自分がそれを意志しようとして欲するところのものを意志する自由

⇒ 自分の欲する意志を持つ自由

それゆえ、彼の意志と彼の二階意欲との一致を確保 **secure** するとき、パーソンは意志の自由を発揮する。そして、彼の意志と彼の二階意欲とが不一致であるとき、この自由を持たないパーソンが、それ[自由]を欠いていると感じる。

Ex. 嫌々ながらの中毒者の意志は自由ではない。そしてまた、ワントン中毒者の意志も自由ではない。ワントン中毒者は、彼が欲する意志を持ってもいなければ、彼が欲する意志とは異なる意志も持っていない。彼は二階の意欲を一切持っていないので、彼の意志の自由は彼にとって問題とはならない。

人間の複雑な構造がもたらす難点

[1]二階の欲求に関して相反する感情を持ち ambivalent、衝突、そして自己欺瞞などが、一階欲求と同じくらい沢山ある。そして、ある人の二階欲求の中に解消されない衝突があるとしたら、彼には二階意欲が一切ないことになってしまう。というのも、この衝突が解消されないと、彼は、自分の一階欲求のどれが自分の意志であるのかということに関していかなる選好も持たないことになるから。こうした場合、異なった仕方ではあるが、嫌々ながらの中毒者と同じように、この人は、意志の自由を持っていないことになる。

[2]彼の二階欲求が衝突し合っている場合¹、二階よりさらに高次の欲求や意欲というものを、パーソンは持つかもしれない。さらに高次に上がる欲求の階層について、理論的な制限はない。とはいえ、そのような一連の作用を、恣意的にカットすることなく終わらせることは可能。

パーソンは自分自身を、自分の一階欲求のうちの一つと、決定的に decisively 特定させるとき、このコミットメントは、潜在的には終わりが無い高次階の配列のはじめから終わりまで、「とどろく resound」。保留や衝突なく、自分の仕事に集中したいという欲求によって動機付けられたいと欲するパーソンについて考えてみよう。この欲求によって動かされる二階意欲は決定的な意欲だということによって、さらに高次には昇らなくなる。

4

意志の自由と道徳的責任

意志の自由と道徳的責任とは、これまで哲学・倫理学史上で長く議論されてきたが、道徳的責任と意志の自由の間にある関係は、極めて幅広く誤解されてきた。つまり、《**パーソンが彼のなしたことについて道徳的責任を負うのは、彼がそれをしたとき、彼の意志が自由であった場合に限られる**》**というのは真ではない**。なぜなら彼は、たとえ彼の意志がまったく自由でなくとも、それをしたことについて道徳的責任を負う可能性があるからだ。

「パーソンの意志は自由である」は、「彼は実際に自分の意志を構成したのとは別様になしえた could have done otherwise」と言い換えられる。しかし、彼が別様になし得たと想定するとしても、彼は別様にはなさなかったことだろう。彼が行為したとき彼を動かした意志が

¹ ラーメン食べたい：一階
うどんを食べたい：一階
⇒ 一階欲求同士の衝突

子供を持ちたい—この D を持ちたい：二階
ヒューム研究したい—この D を持ちたい：二階
⇒ 一階では比較不能だが、二階に上がってはじめて衝突が生じる

彼の意志である理由は、彼がそれをそうであれと欲したからである[二階の意欲]。それゆえ、彼は「自分の意志は自分に対して強制されたものだ」と主張できないので、彼が反対して選んだ選択肢が実際に彼に利用可能であったかどうかを探究することは、彼の道徳的責任の評価とはまったく無関係である。

Ex 三番目の種類の中毒者を考えてみよう。彼の中毒症状は嫌々ながらの者、およびワントン中毒者の中毒症状と、同じ生理学的基礎をもち、また同じほど抵抗できない渴望を持つものの、**彼は自分の状態を心から喜んでいる**。彼は自らすすんでなった willing 中毒者であり、ドラッグを服用したいという欲求以外の欲求を持ち合わせていない。

自ら進んでなった中毒者の**意志は自由ではない**。というのも、ドラッグを服用したいという彼の[一階]欲求は、この欲求が自分の意志を構成するものであって欲しいと彼が欲するか否かに関わらず、**効果的なもの**であるからだ。**だが**、**彼がドラッグを服用するとき**、彼はそれを**自由に、自分自身の自由意志から行なう**。彼の状況には、ドラッグを服用したいという彼の一階欲求の重複決定 overdetermination²が関係していると考えられる。この[一階]欲求が、彼の効果的な欲求であるといえるのは、彼が生理学的に中毒に冒されているからだが、それが彼の**効果的な欲求**であるといえるのは、彼がそれ[一階欲求]に**そう**[効果的な欲求]であって**欲しいと欲する**[意欲する]からでもある。彼の**意志**[一階欲求]は**彼のコントロール外**にあるが、ドラッグへの自分の欲求が効果的であって欲しいという彼の二階欲求によって彼は**この意志**を自分自身のものとしたのだ。それゆえ、彼のドラッグへの欲求が彼の中毒のためだけではないということを考えると、彼にはドラッグを服用することに対する**道徳的責任がある**かもしれない。

__ + [2] + 意欲 ⇒ 行為

↑

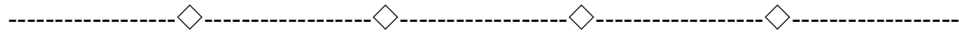
(1)中毒症状から

-----◇-----◇-----◇-----◇-----

² In contemporary analytic philosophy an event or state of affairs is said to be overdetermined if there are more than one distinct, sufficient causes of it. Whereas there may unproblematically be recognised many different necessary conditions of the event's occurrence, no two distinct events may lay claim to be sufficient conditions, since this would lead to overdetermination. A much used example is that of firing squads, the members of which simultaneously firing at and 'killing' their targets. Apparently, no one member can be said to have caused the victims' deaths, since they would have been killed anyway. Overdetermination is problematic in particular from the viewpoint of a standard counterfactual understanding of causation, according to which an event is the cause of another event if and only if the latter would not have occurred, had the former not occurred. In order to employ this formula to actual complex situations, implicit or explicit conditions need to be accepted to be circumstantial, since the list of counterfactually acceptable causes would otherwise be impractically long (e.g. the earth's continued existence could be said to be the (necessary) cause of one drinking one's coffee). Unless a circumstance-clause is included, the putative cause to which one wishes to draw attention could never be considered sufficient, and hence not comply with the counterfactual analysis.

Q1：結局、この第三の中毒者はパーソンなのか？ A：Yes

Q2：パーソンであることは道徳的な帰責の必要条件なのか？ A：Yes？

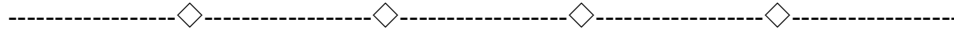


意志の自由についてのフランクファートの考え方は、**決定論の問題に関しては中立的**。

「パーソンには、自分がそれを欲することを欲するところのものを欲する自由があるということ」は、**因果的に決定されている**はずと考えることができる。もしこのように考えられるなら、**パーソンが自由意志を享受することは因果的に決定されている**のかもしれない。[→**ハードデターミニズム**]

他方で、パーソンが自分の欲する意志を持つ自由があるというのは**偶然に過ぎない**と考えることができると思われる。もしこのように考えられるのなら、意志の自由を享受する人もいれば、持たない人もいるということは、**偶然の出来事**なのかもしれない。[→**リバタリアニズム**]

もしかすると、数多くの哲学者たちが信じているように、事態は、例えば一連の自然的諸原因の帰結のように、**偶然以外の仕方**で生じるということも考えられる。もし、実際に第三の仕方、関連する事態が生じると考えることができるなら、パーソンがそのような第三の仕方、意志の自由を享受するはずだということもまた可能である。[→**ソフトデターミニズム**]



・意志が自由であるための条件(フランクファートは[1][2]の二つしか言及していない)

[1]「二階の意欲」構造を持つ

[2]二階以上の欲求を満足させる：will—volitionを貫ける

[3]複数の欲求系列を持つ) ← フランクファートはこの条件について言及していないが入れないとダメ

以上三つの条件を踏まえることで

〈unwilling addict：意志が自由なパーソン〉

薬を服用したい — 対応する二階欲求

薬を服用したくない — 対応する二階欲求

〈willing addict：意志が自由でないパーソン〉

薬を服用したい — 対応する二階欲求

の区別がつくようになる

